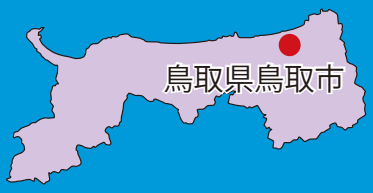
3度にわたる川の付け替えで都市整備を図る 袋川（ふくろがわ）改修



山名氏の出城にすぎなかった鳥取城（久松山麓）が、因幡国の中心となるのは天正元年（1573）に山名豊国が布施天神城から鳥取城へ移ったことに始まります。そして関ヶ原の戦い後、慶長6年（1601）に池田長吉が因幡北東部6万石の鳥取城主になると、自然のまま流れていた袋川を利用して内堀の改修、外堀の開削、城下町の拡張など防衛強化の改修を行ったのが最初の袋川の改修です。

元和4年（1618）、52万石の姫路藩から因幡・伯耆国32万石に転封された池田光政は、城下が小規模であったため居城地の評議が行われ、新規の建設は日程及び財政面での不利益が予想されたため、鳥取城下を広げることになりました。

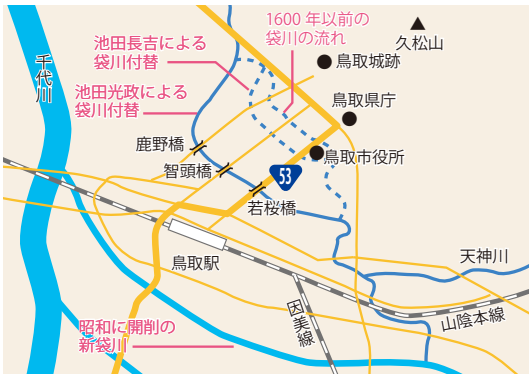
翌年から家老日置豊前は、農作業に支障のない1,2月は藩内すべての農民を動員しました。まず長吉時代柳土手で惣構としていた箇所に橋を架けて大手とし、4丁ばかり西南へ新川を開削する付け替えは、現在の御弓町付近から材木町の出合橋付近までの長さ4～5町（約1.6～1.8㎞）、川幅7間（約12.7 m）、深さ3間半（約6.3 m）の工事で、新しい袋川には、内側の城下町と外の郊外を結ぶために5カ所に橋が架けられました。これが2度目の袋川付け替え工事です。

新川の内側には掘削土で防御用の土手を築き、竹を植えて惣構の要害としました。また、土手には舟の荷揚げ場であり、町屋の水汲み場ともなる袋川への降り口「為登場（いとぼ）」が20カ所以上つくられ、その内側には有事の際の軍事用道路となる「武者走り」（幅2間）が設けられました。

長吉時代をはるかにこえる城下町の拡張に要した歳月は、明らかにされていませんが、久松山麓は沼沢地であったため埋め立てには多くの人力が必要とされたので、少なくとも光政の在任期間中である寛永9年（1632）までの15年間は要したといわれています。

その後、幾度となく鳥取は水禍に見舞われ、特に大正7年（1918）、同12年と相次ぐ洪水で鳥取市街地は大きな被害を受けたため、千代川直轄改修事業が始まりました。本川の堤防整備とあわせて昭和3年（1928）から新袋川の開削（延長約3.8㎞）が実施され、鳥取市街地の治水の安全度は高まりました。光政が植えた竹は桜並木にかわり、市民の憩いの場となっています。度重なる人工河川の開削により発展してきた鳥取市、さらに新袋川を越えて市街地は広がりを見せています。

■袋川変遷図



舟運の面影を残す雁木
賀露港や千代川上流から高瀬舟や筏が往来し、物資の流通拠点として水辺はにぎわった。

春の袋川通り
昭和27年の鳥取大火災後に植えた桜も育ち、川沿いの桜並木が市民の憩いの場となっている。

現在の袋川通り
ひときわ目立つ赤い橋は若桜橋と智頭橋の間にある花見橋。